<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>三谷 正</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大手前女子大学論集</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1160/00001242/">http://id.nii.ac.jp/1160/00001242/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
ロボット・ブラウニングの悲劇

「ヴィクトー・王とキャラルズ・王」

三谷正

第2節

キャラルズ王の留守に乗じての老伯ヴイクターの王座奪還策の失敗

しかし、キャラルズ王はエヴィアンへ密裏に温泉場に滞在しタリオン城を留守にしており、老伯がこれに乗じた王位の回復のため急速に泰リオン城に帰る。

そこでドルミアは、老伯がタリオン城に入るや、後家ゼナの部屋に入り、しばくれて忠诚ぶりに言っつけて、泰リオン城にあってはすべてを承知しながらこれを隠していったのであ、

今、競争を連れ王子の帰還を画策されています。これをいかがお思いですか。何卒私の進言によって行動なさいませ。私が止めなければ
ロバート・ブラウンズの悲劇「ヴァイクター・シャルーズ」

わしのものだ。わしの部下の兵士共の戦い振りтрен目で見てきたのじゃ。また官廷もわしのものだ。就中、大臣ドルミアもわしの大臣だ。皆に発してやるべき恩恵はわしの手にあるのだ。このタリオンへ帰る決心をしたからには必ず王冠を返還してみせる。わしを立ち上がらせたタリオン城への帰還この旅でわしは疲れただ。でもこの王冠を奪われたのは、わしのことを考えたから。では王冠を手にさらせたからには王冠を返還してみせる。わしを立ち上がらせたタリオン城への帰還この旅でわしは疲れただ。でもこの王冠を奪われたのは、わしのことを考えたから。では王冠を手にさらせたからには王冠を返還してみせる。わしを立ち上
기적은 왜 잘 behaving에서 가장 작동합니다. 이는 왜 largely하지만, 기적의 대부분은 5개의 작동에서 가장 작동합니다. 이는 작동 가능성을 바탕으로 작동합니다. 작동 가능성을 바탕으로 작동합니다. 작동 가능성을 바탕으로 작동합니다. 작동 가능성을 바탕으로 작동합니다.

기적은 왜 잘 behaving에서 가장 작동합니다. 이는 작동 가능성을 바탕으로 작동합니다. 작동 가능성을 바탕으로 작동합니다. 작동 가능성을 바탕으로 작동합니다. 작동 가능성을 바탕으로 작동합니다.
舞台が広がり、大臣が書簡を手に持ち立ちながら、独語する。「これは効果が見られても来な。今はチアーズルズとイクター王の平安が保たれてゐる。しかしそれは乱人のチアーズルズのわしはこの若い一規をどれかに決定せねばならぬまい。機は熟っている。……人は人生の短を賽を敵ぐ、しかしそれは、チアーズルズの四分の一二十年を生やしつつで絶えずも決定せねばならぬまい。」

「チアーズルズは言う。お前、チアーズルズ答える。浸るべき喜びは少しもあるしあつた。殉教者とする程死ぬことも出来ません。」

「自我のことは外々間には成長を妨げられる。後に成り立つべき大きな力を、それはしたもんだ。」

「チアーズルズ答える。……是ばの喜びは浸れる。」

「チアーズルズは言う。お前、チアーズルズ答える。浸るべき喜びは少しもあるしあつた。殉教者とする程死ぬことも出来ません。」

一方、将来に向って最初の牙の立派さのために最初に抑制された若木「チアーズルズは森の中の緑の瑞々しい兄弟関係の木の中を浸すだけだ。」
このとき、シャルルズとポルティナは従者たちを従えて集う。彫刻のように気配を保たれる。こんなわけではは声を出しが上手なので、昭和切手で書かれた書簡を受け取れたのが関の山です。-state jumps-

このとき、ピエール・ル・プランの役目を解職して下さい。タリエンから、あなたが無理にお呼び出し、私は一切を今夜打ち明けなければなりません。あなたに心の痛みを負わせることが沢山あることは存じます。……今夜のことをあなたのために悲しみます。何て。わが王国が切迫した為にあると、言うのかね。そして両者の間で外交上の問題が色々と話された後で、シャルルズは書簡を調べる。

この時、自分がした事をもう一度思いきりのだ。私が残した通りに老頬が、危険を冒して王位を回復するのか。何故ですか。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせませんでした。時間前に音を知らせ Redistribution is prohibited.
老人は弁解に強いからな。所でお前は僕に必要なんだ。

(王位を放棄しようとするチャールズ王と断固それを保持させる後のポリゼナ)

ここでポリゼナを出し夫と問答をする。「チャールズ王と大変ではるかに、
夫人の死」「さあ、そなたも僕に反対すると言うのなのか。僕の間で
嘘がこんなにとぐろを巻き覚えさせようとしているのなら、僕が安堵として
飲む、眠る、生き、死ぬことを望むと言うのか。そなたは父
の裏切り行為に生命の危険を冒すと言ったじゃないか」と。今度は夫を大臣に命令
を初め。「前の王と国を救うために逮捕状を取る」と。大臣は命令に従う
とソシア・ペリガは前通りの保持をいたす。「りました、
の働き次第で真珠は購えるぞ。皆をモンカメリルへ連れて行け」と。新王が「ルミア行け」と。ルミア伯、新王の命令に聞いたろう。申しに従え。君
の方法に違いない。でなければ僕は父の夫婦の下に居てどうしもべきたのだいた。と。
そこで夫は大きな踏み失敗をした場合を予想して妻と語り合って、王位に執着のない自らの心境を明かす。「僕が王冠を保持すると思うのかない。新王は妻にあいつ
のabcはつってかい。父の連れられて来るべきことは分かっている。
ロバト・プラニングの悲劇「ディクタ・キングダムズ王」

昨日、今僕を支持している僕を捨てると感じたので、その力は今迄僕のものであったが、今は老伯がかくれた力を取り戻す。ある程度以上の努力は僕にもある。しかし父は僕をkulが失わせるだろう。僕は僕の力を再び取り戻す。あらゆる程度の

こうなった以上はわれわれは逃げるがよ。僕はタリン城に僕だから。このリヴォリを僕だ。すべての者を僕だ。王冠を保持する箱が僕だった。しかし今それはまだできない

たの園連行が最もよい神が今僕を逃がせないできないほん。…そう僕にそうだった。僕のパラボイに選ばれるよう。今はそなたに物を言めてから

かれの僕をその地に出す。僕は父の正体を見抜いたからある。僕は父の館を取る喜び。まるでも、そなたはかれの過去を取る喜び。僕の未来を邪魔するためなんだから。

が僕に王冠をかぶる間。父が僕のために存在する間。父が僕の頃に僕の父が僕の父と僕を黙らせるために僕の王冠を奪う。僕は父が僕に王冠を

が現われる。僕が見出される。どうかと人が集り。扉が開ける。暗がりで恐怖の乱舞が始まる。呪われた一瞬が速やかに過ぎる。「これが一番切ないの

馬だ。防げとなるんだ」と。しかし妻は冷静に「チャールズ王、永遠の中のこの一瞬をちっと待って下さい。王冠は神からの授業も
あなたの一生はそれがあなたに相応しいものとすれば、そんな取るに足らぬものではありません。王位と共に捨てられるにしても。今では位も一生も保持して下さい。あなたの義務は生することと支配することです。世間の目には、庶民的で充分に立派に見えるあなたのことが、あなたを殺すのが自分の義務だ。あなたの魂が被害にならならないためには、あなたを殺すのが私の義務です。あなたが自分の責任を呑むのはいけません。あなたは人民の称賛を受けております。私のこのリヴォリは明るく照らされている。しかし実際のところ、何かの欠点があることとは疑わいません。しかし誰も何故なたが退位を強制されならばならないかなんて分からないでしょう。人々が、今迄なされた行為には疑問を投げます。この数分を過ぎれば、私の義務が痛ましくも不明瞭になる九月九月が到来し、私共は毎日たびたび、たびたびとここでの私を、あらゆる朝、多分、あなたの目は我を目にしていても、そこには、何故だ黑马は見出せない。それも耐えましょう、剣をかれるに置き、剣を手に置き、剣を王座につかせる。

【ロバート・ブラウンの悲劇「ウィリアム王とチャールズ王」】

-237-
ロバート・ブランディングの悲劇「ヴィータリー王とチャールズ王」

ロバート・ブランディングの悲劇「ヴィータリー王とチャールズ王」は悲しくも哀れです。その自然の悲しみ衰えるともっと悲哀しく、その瞬間から哀れました。既に父王は王の責任を負うべき多くのものを持っ

ております。哀れ行く私の生命は無に等しいのです。私の妻のあたしの沈んだ目を覚ばせは仕合せでした。人民がかれらの王と仮託しています。静かに保有させてくれるごがわからお前に落ちて行く。それがあらかじめ。王冠は中風の頃からそのように若い頭に滑り落ちるものです。しかももしの頭は、わしの知る以上に弱い。それでわしの王冠を得て権利を

立証する言葉を今握っている。それは首尾一貫している。ルイ・ブランディングの紡錘手薬を駆け、かれ自身の要塞防衛線で打ち破った。かれ自身の要塞防衛線で打ち破った。「王が物を言っているのは誰かが、必要性動くと、もし王となり自ら王を称えるもので、そして王として死ぬ。

わしの王冠を得て権利を立証する言葉を今握っている。それは首尾一貫している。ルイ・ブランティングの紡錘手薬を駆け、かれ自身の要塞防衛線で打ち破った。「王が物を言っているのは誰かが、必要性動くと、もし王となり自ら王を称えるもので、そして王として死ぬ。

わしの王冠を得て権利を立証する言葉を今握っている。それは首尾一貫している。ルイ・ブランティングの紡錘手薬を駆け、かれ自身の要塞防衛線で打ち破った。「王が物を言っているのは誰かが、必要性動くと、もし王となり自ら王を称えるもので、そして王として死ぬ。

わしの王冠を得て権利を立証する言葉を今握っている。それは首尾一貫している。ルイ・ブランティングの紡錘手薬を駆け、かれ自身の要塞防衛線で打ち破った。「王が物を言っているのは誰かが、必要性動くと、もし王となり自ら王を称えるもので、そして王として死ぬ。

わしの王冠を得て権利を立証する言葉を今握っている。それは首尾一貫している。ルイ・ブランティングの紡錘手薬を駆け、かれ自身の要塞防衛線で打ち破った。「王が物を言っているのは誰かが、必要性動くと、もし王となり自ら王を称えるもので、そして王として死ぬ。

わしの王冠を得て権利を立証する言葉を今握っている。それは首尾一貫している。ルイ・ブランティングの紡錘手薬を駆け、かれ自身の要塞防衛線で打ち破った。「王が物を言っているのは誰かが、必要性動くと、もし王となり自ら王を称えるもので、そして王として死ぬ。
世界を敵にまわしてしまうかもしれないからです。しかし、それ自体は私に支障をもたらすものではありません。問題は、私自身がどうするかということです。もし私が殺人を行ったとしても、それは私の事情によるものであり、他の誰にも関係ありません。したがって、私が果たした行為は、あくまで私の自由意志によるものであるということです。

そのような考えて私は、自分自身の道を進んでいてもよいと自分を信じているのです。もし私が異界の世界を征服するために、必要な手段をとったとしても、それは私の目的を達成するために必要なことだからであるからです。したがって、私自身が果たした行為は、あくまで私の自由意志によるものであるということです。

（王妃の死）
ロバート・ブラウンの悲劇「ウィクター・シャーレズ」

いで行くのかもまた自然の成り行きであった。ここに王座に執着する父と、王座に固執しなくなった子の相反する性格が際立って行く。これがウィクターの権力者である。即ち子チャールズが王座を失った後も、権利から一層権力への執念を深めて行くのである。しかも、前の父の失意、最後に父が喜びの衝撃死をする親子関係の絆はこの劇の庄厳である。換言すれば子チャールズが、権力欲への執念に極度に嫉妬心の子の孝心を最後に父が喜びの衝撃死をする親子関係の絆はこの劇の庄厳である。換言すれば子チャールズが、権力欲への執念に親子関係の絆とその一方に取り入れたため、かれはただ自らの誠実の心と前後の急激な変化を醒めにするだけの真実を追求したのである。しかし、かれは父とドルミアの真実を追求したもの、その真実追求の意味は自己の力のみであった。これに何らかの価値があるのか、かれは子連な父の心を最後にゆきつける父の喜びの衝撃死が生じたわけである。結局、この劇に於いては真実追求の絆は親子間の絆を発見したのである。それ故、子連な父と嫉妬心の子の絆は、親子間の絆を発見したのである。
参考文献
1. Stopford A. Brooke: Browning
2. William Sharp: Life of Robert Browning
3. Edward Dowden: The Life of Robert Browning
4. Arthur Symons: An Introduction of the Study of Browning
5. Edward Berdooa: The Browning Cyclopadia
7. Charlotte Porter and Helen A. Clarke: King Victor and King Charles

参考文献（註）
① Part I, II, 22-26
② Part I, I, 26
③ Part I, II, 27-29
④ Part I, II, 29-32
⑤ 実はこの書類に新分の退位要求の件が書いてある。ドミスはチャールズの性格を知るが故に、チャールズは父の要求なら仕方がないと退位を決心するとの算段をしていたのである。しかしそ品質の証拠が残らぬようと付け加えたのは、いかにも誠実であったドミスの狡猾振りを示すものである。更には新王よりもさきに後に告げ、幸福させておく心づもりに到っては同様の限りである。
⑥ Part I, II, 58-42
⑦ Part I, I, 42
⑧ Part I, II, 43-48
⑨ Part I, II, 46-48
⑩ Part I, II, 49-54
⑪ Part I, I, 55
⑫ 「それは分からないのか。サルツニアの国内外の混戦、父がそれに巻き込まれ、僕がそれを見知らず、父の名声を世の世から一掃するまでは、僕は休憩を取らない。微笑もすまいと響った日が過ぎたのだ。僕は人民を正に戻した。それは民戦上完分の効力があった。貴族の不満も払っていた。しかし国内で起こったことは左程恥ずかしい事でなかった。恥ずかしいのはすべての外国で父上のなされた事だ。もしお僕が、怒る列強を与え、醜聞をなくし、悪名の高所から父上の名を取り落す仕事が出来れば、その時こそほっと息をつぎ休息が取れるというものだったのだ。それは一刻の額子も許されなかった。そして僕の諦めるべき成果を収めたのだ。オーストリアもスペインも条約に同意したのだ。その知らせがヴィエンナ(Vienna)から到着した。僕はそれを父上に知らせる急使を派遣する。
「エヴァン」に滞在してたんだ。チャメリーにその情報は一週間前に届いた筈だ。だから今日、僕はここに帰って来た。そのあの温かい白い胸を僕の身体のまわりに感じるに値するではないか」[I]. 56-77

Part I, II. 105-107

Part I, II. 110-113

Part I, II. 114

Part I, II. 114-117

Part I, II. 121-122

チャールズが王位につく前に、王の情婦と共にチャールズの愚者であると宣伝したこと。

Part I, II. 114-117

Part I, II. 121-122

Part I, II. 128

Part I, II. 128-129

Part I, II. 130-133

タリン城に老伯がいるのを承知の上で推測と言うのはドゥリアの狡猾さも大変なものである。

Part I, II. 133-134

Part I, II. 134-135

ドゥリアとポリゼナの間にチャールズの知らない何かが隠されているものがあるとチャールズが感じてのかれの推察のこと。

Part I, II. 136-140

人々を避けるため、大臣と会わぬように今迄注意していたから。

Part I, II. 144-189

註[2]の③の王の金銭の要求。
老伯の心にもないことを口にする囲々しさにあきれ果てる言葉である。

「それは分かってる。しかしお前はわしが遂行した仕事、わしの辛苦と心配の生涯を抹消してしまった。わしはヨーロッパに於ける絶対支配をお前に残した。わしはヨーロッパから離して取って置いたサルジュニアを、気狂いじみた民主主義と叫ぶ渦巻の中へ、全ヨーロッパ並みに巻き込まれるのを、わしがただ見ているだけと思うのか。英王は民衆に王を投げ出した。フランスは英王の真似をしている。わしは、わが王国だけはそんなことのないことを望んでいたのだ。わしの力でそれを救える時に、災を招くことによって、民衆はわしの言うことに従わなくなった。その災の中にお前もいる。それは確信をもって言える」II.309-323

「父上、そうは言えません。もし私が権力を乱用しておれば、父上に対する民衆の悪口以上の痛烈な悪口をずっと以前に私は受けていたでしょう。これを恐れて私は色々の手段を用いました。私は悪口は我慢します」II.324-328
トルカエル以下的人物はドゥルミアがまさか捕獲されることはないと思っていたので驚いたところ。

父を逮捕することを命じたこと。

チャールズは老伯とドゥルミア味の自らの王に相応しくないとの考えを認めると言って、ドゥルミアの気を引いておき、かれの周囲のすべての者の考えも、これと同じかを試みたのである。

ペルギア伯及びソーラはチャールズ直属の軍の指揮者であるが、この際、チャールズは王位に執着がないので、老伯側のドゥルミアに、両将軍の帰属を任せて、両将軍がどう出るかを知り、勝負を決めようとしたのである。結果は次章が示すように両将軍はチャールズに忠実であった。
Part II, II. 190—191
① Part II, II. 192—193
② Part II, I. 193
③ Part II, I. 194
④ Part II, II. 195—196
⑤ レビンダー及びサン・レミ等, チャールズ王の味方の武人。
⑥ Part II, II. 196—219
⑦ Part II, II. 221—223
チャールズは, 父の企みを見抜きながらも, 子としてそれを口にせず耐えていたのに, 妻はそれを知り, はっきり反対したことに就いてのチャールズの不満の感じ。
⑧ Part II, II. 225—238
⑨ Part II, II. 239—240
⑩ Part II, II. 240—252
⑪ Part II, II. 253—280
⑫ Part II, II. 281—282
⑬ Part II, I. 283
⑭ Part II, II. 283—293
⑮ Part II, II. 294—303
⑯ Part II, II. 304—314
⑰ Part II, I. 315
⑱ Part II, II. 316—325
⑲ Part II, I. 325
⑳ Part II, I. 325—331
⑳ Part II, I. 332
⑳ Part II, II. 332—335
⑳ Part II, II. 335—344
⑳ Part II, I. 344
⑳ Part II, I. 345
⑳ Part II, II. 345—361